

第1回「デザイン学論談」レポート

日 時 : 2015年6月15日 16:30~19:00

場 所 : 吉田キャンパス デザインファブリケーション拠点

参 加 者 : 11名

教員: 富田、中小路、荒牧、山内、平本、北

学生: 太田、北野、佐藤、越智、長見

文 責 : 北野 清晃

京都大学情報学研究科社会情報学専攻博士後期課程1回生

京都大学デザイン学大学院連携プログラム1期生

「デザイン学論談」は、本誌「デザイン学論考」の内容を共有し、議論をより深めるために始められた討論会である。「論談」の進行は、登壇者が「論考」のテーマに関して話題提供を行った上で、参加者とともに車座になって自由な議論を交わすものである（概ね1題につき30分程度）。初回となる今回は「論考」の執筆者のうち4名が登壇した。下記に、4名の登壇者の発表内容とその後の自由討議の論点をまとめる。



太田 裕通君（デザイン学1期生）

太田君のパートでは、デザイン学論考を概観して太田君が感じたことを題材として提供し、様々な議論が展開された。最も議論が白熱した2点を紹介する。1点目は論考の各執筆者のセンテンスにも度々見られる「実践」という言葉についてである。具体的には、「実践とは何か」「デザインと実践の関係は」など、各研究領域での捉え方の違いを踏まえながら意見が交わされた。2点目は、太田君のデザインに対する見解についてである。具体的には、太田君は行為として捉えるデザインよりも、デザインをする人＝デザイナーのあり方に関心を持ち、

独自のデザイナー観について言及していた。

北 雄介先生（デザイン学ユニット）

北先生のパートでは、デザインをマクロな視点から議論する試みについて問題提起し、現在取り組んでいる研究内容と絡めて議論が展開された。マクロ視点でのデザインでは、人々がデザインすることによる現象を長期的な時間の流れの中で捉えるものである。具体的には社会や地域の現象の「変化」に着目し、変化をネットワーク化（CSOモデル（仮））することで、多種多様なデザインや変化を統一した文法で表現しようという試みである。これに対し、自由討議では、デザインをマクロ的に捉えることの意義や懸念、研究上の困難性などが取り上げられた。

荒牧 英治先生（デザイン学ユニット）

荒牧先生のパートでは、「ことば≒リアル」というタイトルのもと、ビックデータによるテキスト分析の世界と現実世界との差異をいくつかの事例で紹介した。紹介された「東大・動物でのテキスト分析」や「テキストによる形態の描写」「Yesterday Tomorrow Ratio」などユニークな分析事例が参加者の関心を呼んでいた。一方で、ことばとリアルが上手く連動し分析可能な事例とそうではない事例の存在から、その差異に研究の可能性があるとの指摘があり議論が盛り上がった。

山内 裕先生（経営管理大学院）

山内先生のパートでは、「文化のデザイン」と題して、これまでデザインの領域で議論されてこなかった「文化」に焦点をあて問題提起がされた。近年取り組んできたサービスデザインでの研究成果から発展するかたちで、次の研究テーマとして「文化」を掲げている。議論の題材として、マクドナルドが拡大した社会的現象について2つの捉え方を提示した。1つは、「The McDonaldization of Society (Ritzer)」で言及される効率性や予測可能性等の構造的側面である。2つめは、「The Sign of the Burger: McDonald's and the Culture of Power (Kincheloe)」で言及されるサイン・シンボル等の文化的側面である。これらの相違点について議論するとともに、そもそも「文化」の持つイメージや捉え方などの本質的な議論が展開された。

まとめ

「デザイン学論談」を終えて、議論が盛り上がった点を振り返ると、デザインの領域でまだ議論がされていない点、つまりもやもやしている点であったと思う。デザインの複雑さを感じると同時に、研究的な可能性を感じる内容ばかりであった。「デザイン学論考」は執筆者の想いや思考をとにかく書いてみるという機会であり、研究的には未熟であるものの鮮度の高い内容である。であるがゆえに、新鮮なテーマを自由に討議する場として、「デザイン学論談」という場のもつ魅力を感じるものであった。

次回「論談」は、次号「デザイン学論考 vol.5」の発行までに行なう予定。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。